

悪魔の息子から聖人へ *Sir Gowther* における奇蹟

秋 篠 憲 一

はじめに

Sir Gowther (以下 SG と略す) は、作者不詳で、1400 年頃に書かれたと考えられている。この作品は、アーサー王伝説でおなじみのマーリンの異母兄弟であるゴウサー卿の罪と悔悛そして奇蹟の物語である。写本としては、15 世紀後半に作成されたと考えられる、スコットランド国立図書館所蔵の MS Advocates 19.3.1 (以下 A 写本と略す) と、英国図書館所蔵の MS Royal 17. B. 43 (以下 R 写本と略す) がある。

SG の主たる原拠は、悪魔のロベールの物語で、フランスで、12 世紀後半に韻文の *Robert le Diable* (以下 RD と略す) が書かれている。また英国においても、1510 年頃に、15 世紀末にフランスで出版された *La vie du terrible Robert le diable* の散文訳である *Robert the Deuyl* (以下 W 版と略す) が Wynkyn de Worde によって印刷出版されている。ちなみに、上記の 15 世紀末に出版されたものは、14 世紀に書かれた韻文作品 *Dit de Robert le Diable* の散文訳である。また 1831 年には、Meyerbeer 作曲のオペラ *Robert le Diable* がパリで初演されるなど、中世以来、悪魔のロベールの物語は、巷間に流布してきた。

拙論では、SG と聖人伝の関係について考察するわけであるが、方法としては、SG の特徴を浮き彫りにするため、RD と W 版との比較分析を行う。SG、RD 及び W 版の中で、最も聖人伝的色彩が濃いのが RD であり、対照的に世俗的騎士道物語に近いのが W 版である。D. Mehl は “. . . *Sir Gowther*

holds a particularly interesting position between the romances and the legends.”¹⁾と述べているが、果して、SGはロマンスか聖人伝か。SGに描かれる奇蹟の機能・役割に焦点をあて、この作品の聖人伝的要素について論じてみたい。

本格的な作品分析に入る前に、順番にSG、RDそしてW版のプロットの要約をする。

オーストリアのある公爵の夫人は、夫から石女であると愚痴られ、神と聖母マリアに、どのような方法であれ、何とか子どもを授かるように祈る。ある日、果樹園で、彼女は夫に瓜二つの男と関係をもつ。しかしながら、夫と思った男は、悪魔の姿に変わり、彼女は悪魔の子どもを身ごもったことを告げられる。彼女は、夫には、その夜二人で励めば子どもが授かると嘘をつき、やがて子どもは誕生し、洗礼を施され、ゴウサーと名付けられる。その後ゴウサーは尼僧を強姦し、焼き殺すなど悪徳三昧に耽る。やがて、その国のある年老いた伯爵から、諫められ、悪魔の申し子と呼ばれ、激怒したゴウサーはさっそく母のところへ行き、出生のいきさつについて尋ね、恐るべき真相を告げられる。主に慈悲を祈った主人公は、悔悛の秘跡をうけるため、自らつくった偃月刀だけを持ってローマ教皇のもとへ旅立つ。教皇からは、贖罪行為として、食べ物としては、犬の口から奪い取るもの以外は口にしてはならないこと、またどんな時にも決して言葉を発してはならないことを申しわたされる。ゴウサーは、このあと、ドイツの皇帝の庇護のもとで、贖罪の苦行の日々を送ることになる。この皇帝には、実は、美しいが、不幸にも口が利けない娘がいる。その娘をなんとか手にいれんものとサルタンが、皇帝に彼女との結婚を申し入れるが、拒否されてしまう。怒ったサルタンは軍勢を率いて皇帝を攻める。皇帝は窮地に陥ることになるが、ゴウサーは、その皇帝を助けんがため、神に武具と馬をお与え下さいと祈る。神は、その祈りをかなえ、彼に黒・赤・白の武具と馬を与える。三日間にわたり、主人公は、偃月刀をふるい、敵であるサラセン人たちを撃破する。しかも、それぞれ一日ごとに違った色の馬に跨がり、また馬と同じ色の甲と鎧を身に付けるので

ある。しかしながら、三日目の戦闘で、肩に傷をうけ、それを目撃した皇帝の娘が、悲しみのあまり、塔から落ちて二日間死んだかのように身動きしなくなる。教皇も葬儀のために駆けつけるが、ここで神が奇蹟を起こす。死んだはずの娘は生き返り、口が利けないはずの彼女が、神に代わって、ゴウサーの罪が赦されたことを告げる。主人公はその娘と結婚し、過去に犯した罪の償いとして、修道院と女子修道院を建立する。彼は、皇帝として善政に努め、教会を助け、神への忠誠を示す。死後、彼の廟に詣でる病んだものたちがその病を癒されるという奇蹟が行われ、真の聖者として人々の崇敬を得る。

次に、RDのプロットについて概説する。ノルマンディのある公爵夫人は、どうしても子どもを授かりたいため、悪魔に祈る。その結果公爵夫妻にはロベールが誕生する。ロベールは、ゴウサーと同じように悪徳の限りを尽くす。ある時、50人以上の尼僧を殺し、おぞましい顔をした自分に、まわりの人々が恐れをなして近づこうとしないのにはたと気がつく。なぜ人々は自分のことをそれほどまでに恐れるのか。彼は自問する。そして、この邪悪なロベールも聖霊によって回心する。母から誕生の詳細を聞かされたのち、髪を切り、剣を捨て、教皇に会いに行く。教皇からは、ある隠者のもとへ行くようにいわれる。そして神は、隠者を介して、既述したゴウサーのものと同じである二つの贖罪行為に加えて、狂愚をよそおうことを課す。このあとローマの皇帝のもとで、罪の償いに励むことになる。この皇帝には、SGと同じように、美しいが口が利けない娘がいる。この娘に惚れ込んだ家令が、武力でもって、娘との結婚を皇帝に迫る。さらに、内乱に乗じて、トルコ軍が大挙来襲する。ロベールは、神に向かって、どうぞ皇帝をお助け下さいと祈る。やがて、神の使者が白の武具を身にまとって彼のもとを訪れ、神が皇帝のために戦うよう命じておられることを告げる。さっそく使者から白の具足を借り受け、三度にわたる異教徒との戦闘で皇帝側に勝利をもたらす。皇帝は、何とかして自分を助けてくれた騎士の正体を知ろうとする。トルコ軍の三度目の攻撃の時に味方の騎士にあとをつけさせるが、不幸にも、ある味方の騎士が、ロベール

ルの馬を傷つけるかわりに、ロベール本人の腿を槍で突いてしまい、穂先が欠けて傷の中に残ってしまう。そこで皇帝は、その傷を負った騎士に娘を与えることにする。これを知った例の邪悪な家令は、自らの体に傷をつけ、白い武具に身を包み、槍の鉄片を持参して、われこそは件の騎士であると名乗り出る。しかしここで奇蹟が起こる。口が利けないはずの皇帝の娘が口を利き、宮廷にいる道化（ロベール）こそ白い甲冑の騎士であることを告げる。さらに例の聖なる隠者に促されて、ロベールは自分の身元を明かす。これを聞いた皇帝は、娘をロベールに与えようと申し出るが、主人公はこれを断り、隠者ととともに森の中で神に仕える日々を送りたい旨伝える。隠者ロベールは、聖なる隠者が亡くなったあとも、森の中で神への忠誠を貫き、神は、ロベールのために多くの奇蹟を顕し、彼は人々から聖なる隠者として崇敬される。

W版では、ロバートは、隠者になる代わりに皇帝の娘と結婚をする。そして故国ノルマンディーに新妻とともに帰っている間に、あの不忠なる家令が皇帝を殺してしまう。さっそくロバートはローマに帰り、裏切り者の家令を捕らえて処刑する。主人公は立派な支配者として臣民に愛され、その息子リチャードはフランスのシャルルマーニュ王のもとで武勲をたて、キリスト教のために異教徒と戦ったことが述べられる。

このようにSG, RD, 及びW版では三者三様のプロットの展開がなされ、特に、物語の結末の部分で相違が鮮明になる。

I 誕生・悪行・回心

SG では、物語の冒頭で主人公ゴウサーの誕生のいきさつが語られる。語り手は、“Y schall tell yow of a warlocke greytt, / What sorow at his modur hart he seyt, / With his warcus wylde.” (22-24)² と述べ、ここで主人公を“warlocke”(悪魔)と呼んでいる。ゴウサーはあくまで悪魔の子であり、“Marlyon halfe brodur”(95)なのである。ロベールやロバートとの違いがはっきりする。ゴウサーの母を悲しませる残虐非道ぶりは、“He wold wyrke is fadur wyll / Wher

he stod or sete.”(173-4) と語られるように、父である悪魔の意志に従っただけなのである。これに対して、ロベールもロバートも悪魔と人間の間でできた子どもではない。RDでは、ロベール自らが、「私の母は、不運にも、悪魔に私を授けるよう頼み、そこで悪魔はこのわたしに、およそ悪徳三昧の少年時代を過ごさせたのです」(408)と告白し、その直前で、ノルマンディー公が父で、母はその奥方であるとはっきり述べる。またW版では、ロバートの誕生に関して語り手は“... his moder had gyuen hym to the deuyll in his concepcyon...”(29)⁴と述べ、主人公が母の体内に宿った時、彼は悪魔に与えられたことを示す。さらにロベールの悪行について語り手は、「まさしく悪魔につき動かされるままの所行だった」(332)と語る。ゴウサーのように悪魔を父に持ったわけではないが、ロベールもロバートも、悪魔の力によってこの世に生を受け、またその悪魔の力に支配され、善行を施そうとしてもそれができないのである。

ちなみに、ゴウサーと同じように、人間と悪魔の子であり、ゴウサーの異母兄弟とされるマーリンはなぜ悪徳の道に走らないのか。Robert de Boron作とされる*Merlin*によると、マーリンの母は、貞潔な女性であるが、悪魔の計略のために寝ている間にマーリンを身ごもる。結婚もしていないのに子どもを身ごもった母は、悔悛の秘跡をうける。神は、この母の善行に報いる。その子どもを母の罪ゆえに罰することはせず、それどころか未来のことを知る力を与える。すでにマーリンは、悪魔から過去についての知識を授かっていたのだが、神から未来についての知識を与えられた時、マーリンは、神のしもべとなる。⁵ 悪魔を父に持つゴウサーとマーリンは、それぞれ違った運命を背負うことになる。

SG, RD そしてW版では、主人公の悪事は、騎士に叙任されたあとも続く。その残虐ぶりは、目を覆いたくなるようなものであるが、克明に描かれていく。悪徳のクライマックスが、聖職者・神に仕える人々への非道な仕打ちである。この語るにもおぞましい悪魔の所行のあとに、主人公の回心が描

かれる。

SG では、その国のある老いた伯爵がゴウサーに忠告を与える。

An olde erle of that cuntre
 Unto tho duke then rydys hee,
 And seyde, 'Syr, why dose thou soo?
 We howpe thou come never of Cryston stryn,
 Bot art sum fendys son, we weyn,
 That werkus hus this woo;
 Thou dose never gud, bot ey tho ylle:
 We hope thou be full syb tho deyll'—
 Syr Gowther wex then throo. (202-10)

激怒したゴウサーは、直ちに母のもとへ行き、母に偃月刀を突きつけて、ほんとうの父親は誰かと迫る。真実が明らかになったとき、明かした方も、明かされた方も涙を流す

Then wepyd thei bothe full sare.
 'Go schryfe the, modur, and do tho best,
 For Y wyll to Rome or that Y rest,
 To lerne anodur lare.'
 This thought come on hym sodenly:
 'Lorde, mercy, 'con he cry
 To God that Maré bare. (231-37)

ゴウサーは、父親である悪魔から自分が救われるよう神と聖母マリアに祈る。ここで注目すべきは、真相を知った時、主人公が母とともに回心の涙を流すところである。またこの回心に至るまで、父である悪魔の意志を忠実に実行する主人公の血塗られた悪徳の日々が重点的に描かれるが、母と子の対話の場面は、これが最初である。父なる悪魔の支配を脱し、母との心の触れ合いによって、ゴウサーは人間性をとりもどすのである。また、いままでとは違

う生き方を学ぶためにローマへ赴くと言い出すが、この考えも突然浮かんだものである。ここでは、はっきり述べられていないが、ゴウサーの回心は、神の導き、恩寵によることが暗示されている。

RDでは、主人公を諫めるような人物は登場しない。代わりに、聖霊がロベールを回心へと導く。誰も恐れをなして自分に近寄らないことにロベールは突然気付く。

ロベールは深くと考えるにふけり、自らはげしい驚きに打たれる。これはいったい何だ、どういうわけで、世の人々は自分をこんなに恐れるのか。つまり、誰にも文句をつけられず、抵抗もなしに良いことをしようと思うと、たちまち別の考えがやってきて、がたがた文句をつけ、あっというまに、良いことをしようなどという考えからひき離され、別の道へと引きずりこまれる。・・・自分が天なる神を憎んでいるのは・・・母親のせいなのだ。・・・そこでロベールは高く頭を掲げた。聖霊がかれに声をかけているからだ。聖霊はかれの心の中に、自分でもまだ神の友になれるという考えを吹き込んだのである。

(333)

さっそくロベールは母のところへ行き、彼女から真実を告げられ、悲しみと恥辱のため涙を流す。そして母に、「もう二度とわたしは悪魔の殉教者にはならないでしょう・・・これまでわたしがたっぷり染まってきた悪行と醜悪な罪をきびしく贖いたいと思います」(334-35)と述べる。また、多くの人々の命を奪った剣を投げ捨て、悔俊の秘跡をうけるためローマへ行く。あくまで自ら鍛えた剣を手放さないゴウサーと対照的である。SGでは、ローマに赴く時に、例の老伯爵に領土の統治を託し、悔俊の秘跡をうけるために教皇のもとへ行くと述べるが、その言葉の中に、ロベールが用いた「醜悪な罪」というような厳しい罪の自覚を示すような表現はない。

ちなみにW版では、ロバートの回心に関しては、神の関与は明示されない。母から出生の秘密を聞いたのち、「I will take the way to Rome to be

assoyled of my synnes, whiche are innumerable, and to abhomynable to recounte”(22)と述べる。ここでは、RDと同じように、己の犯した罪に対する主人公の痛悔の念が鮮明に描かれる。

さらに、RDでは主人公が直ちにローマへ向かうが、W版では、荒野にいる仲間のところへ行き、かれらに犯した罪を悔いるように説得する。しかし彼らはロバートの説得に耳を貸そうとせず、仕方なくロバートは全員の命を奪う。その後、ローマへ行く途中で、かつて悪事を働いたことのある修道院を訪れる。そして彼の縁者でもある修道院長に、膝をつき涙ながらに過去に犯した過ちを詫びる。その際、今まで住み処としてきた館の鍵を修道院長に託し、父であるノルマンディー公にそれを届け、その場所に保管してある盗品が被害者のもとに返されるよう依頼する。翌日、馬も刀も捨てて、ひとりでローマへ旅立つ。

回心からローマ教皇のもとへの旅立ちに関して、SG、RD、W版はそれぞれ特徴を表している。主人公が、回心の時点でいかに己の罪を自覚、痛悔しているのか、また騎士の象徴である剣を捨てるのか、否か。またW版では、残虐非道の罪の後始末まで細々と描かれる。まさに物語は、作者の匙加減でいかようにも姿を変える。

II 悔悛の秘跡

Chaucer の*The Canterbury Tales*において教区司祭は、悔悛の秘跡について次のように述べる。

Now shaltow understande what is bihovely and necessarie to verray parfit Penitence. And this stant on three thynges:/ Contricioun of Herte, Confessioun of Mouth, and Satisfaccioun./ For which seith Seint John Crisostom, “Penitence destreyneth a man to accepte benygnely every peyne that hym is enjoyed, with contricioun of herte, and shrift of mouth, with satisfaccioun, and in werkynge of alle manere humylitee.” (106-8)⁶

悔悛の秘跡にとって重要なものは、痛悔・告白・罪の償いである。ゴウサーもこの悔悛の秘跡をうけるために教皇のもとへ行く。教皇は、罪の告白を聞く前に、まずはゴウサーが帯びている偃月刀を下に置くように言うが、ゴウサーは、それを拒否する。その理由について“*My frendys ar full thyn.*”(291)と述べる。今まで反社会的行為を積み重ねてきたがために、多くの敵をつくり、このような返答をせざるをえないのであろう。ローマへ出発する前に剣を捨てるロベールやロバートとは際立った対照を示している。ゴウサーは、己の名と自分が悪魔の子であることを打ち明け、さらに“*Y schall the truly swere / At thi byddyng beyn to be / And hald tho penans that thou leys to me, / And never Cryston deyre.*”(282-85)と続ける。しかしながら、己が犯した罪に対する涙を流しながらの心からの痛悔、嘘偽りのない詳細な罪の告白については描かれぬ。主人公の、贖罪の苦行を行い、今後キリスト教徒に危害を加えないという誓いだけで、教皇は次のような苦行を課す。“*Wherser thou travellys be northe or soth, / Thou eyt no meyt bot that thou revus of howndus mothe, / Cum thy body within; / Ne no worde speke for evyll ne gud, / Or thou reydé tokyn have fro God / That forgyfyn is thi syn.*”(292-97) ゴウサーは教皇の前に跪き、赦免を与えられる。このようにSGにおける主人公のうける悔悛の秘跡は、簡潔な記述になっている。RDが5078行の作品であるのに比して、SGは750行からなる物語である。プロットの展開において、登場人物、エピソードについて省略化されており、この場面の描写の簡略化もその現れであろう。

他方、RDでは、教皇ではなく、隠者が主人公に悔悛の秘跡を与える。ロベールはまず教皇に会い、「この世にわたしほどの罪人はありませぬ。じつに悪徳、放埒のかぎりを尽くして、天なる神のお怒りを買いました(336)と、出生のいきさつとともに、涙をながしながら、悪行のすべてを語る。しかしながら教皇は、「ロベールとその悔悟を、憐れだとはお思いになるが、しかしいったいどんな贖いを負わせ、もしくは、与えたらよいかわからない。(337)課すべき苦行について教皇も途方に暮れるほどロベールの罪はあまりにも重

いのである。そこで教皇は、森に住むある隠者のところへ行くように、ロベールに申しわたす。この人物は、一年に三度教皇自らが告解に訪れるほどの聖なる隠者なのである。教皇は、ロベールのために手紙を認め、隠者のもとを訪れた主人公は、さっそくその手紙を隠者に見せる。隠者は、「もし神がそなたに御憐愍をお持ちならば、きっとこのわたしに、そなたの贖罪の御指示を与えて下さろう。いまはひたすら、そなたの犯した諸々の罪を悔悟して居さっしやれ、明日はきっと罪から清められようほどに」(339)と述べる。その夜ロベールは、涙ながらに己の罪を悔いる。翌朝、隠者とともに礼拝堂に入り、ロベールは祭壇の前に腹ばいになり涙で床を濡らしながら神に祈る。そして隠者が聖体をいただきながら祈ると、「一本の手が目の前に伸び、小さな書き付けをさし出し」(340)隠者はそれを受け取る。そこに書かれている文字を読み終わった隠者は、「本物の狂人、まったくの愚者となって抜き身の剣、杖や棍棒をふりまわし、街から街へ、追い立てられること」(341)と述べ、さらにゴウサーが課せられたものと同じものを贖罪行為として申しわたす。また、以上の三つの贖罪の苦行のことを知っている者の命令には必ず従うようにと付け加える。ロベールが身を起こす前に、隠者は彼の罪を赦す。その結果、「ロベールの身に一点のけがれもなく、悪魔の分け前は何ひとつなくなった」(342)ことになる。

以上のように、RDでは、痛悔と罪の告白は教皇に対してなされ、贖罪の苦行の申し渡しと赦免は隠者によってなされる。しかも、苦行は神が直接課すというかたちになっている。また隠者のもとでのロベールの痛悔の様子が克明に描かれているのが特徴となっている。RDでは完全とも言える悔俊の秘跡が語られる。

W版では、教皇のところへやって来たロバートは、「O! holy fader, I am the moost and the greteste syner of all the worlde!」(28)と言い、教皇の前に跪き、神と聖母マリアにかけて、決して今後キリスト教徒に害を及ぼさないと誓う。続いて教皇はロバートに罪の告白をさせるわけであるが、「... the pope toke

Robert aparte, and herde his confessyon, to whome Robert shrowe him deuoutly, shewynge how his moder had gyuen hym to the deuyll in his cocepcyon, wherof the pope was sore aferde.”(29)と簡潔に述べられるだけである。ロバートの告白を聞いた教皇は、直ちに隠者のもとへ行くように促す。主人公の隠者への罪の告白は、子ども時代の同輩に対する暴力行為に始まって、7人の隠者殺害にいたるまで、詳細を極める。RD以上に克明な告白となっている。隠者は、翌朝、贖罪を課すと約束する。その夜、隠者のところへ天使がやって来て、RDと同じ内容の苦行を課すように告げる。さっそく、翌日になって、隠者は、天使を介して伝えられた神の命令をロバートに告げる。そして主人公には神の赦しがあるまで贖罪につとめなければならないと付け加える。この贖罪はロバートにとって、今まで犯してきた罪に比べて“lyght penaunce”(32)であると語られ、語り手は主人公がこの苦行をどのように考えているかについても明かす。これはRDにはない。また罪深く、“proude as a lyon”(30)であったロバートが羊のように従順になり、明らかに美德に満ちた人間になったことは“a fayre myracle”(32)であると語る。ちなみに、W版では、これと同じ表現があと1回、皇帝の娘が口を利く場面で使われる。従って奇蹟という言葉は、この作品では、二回使われるだけである。RDでは、教皇の口から隠者について語られる時「この世に、これ以上聖らかな隠者は居られまい。というのも、その庵では一日も欠かさず、神さまがかれのために奇蹟を起こされる。そのために、大勢の群衆が、ひきもきらずおしよせるほど」(338)と奇蹟について言及されるが、主人公の悔悛の秘跡の場面で奇蹟という表現が使われるのはW版だけである。さらに、W版では、RDとは違って、主人公の涙ながらの痛悔は描かれませんが、その代わり、既述したように、罪の告白が詳細なものになっている。

III 奇蹟

SG, RD, 及びW版では、主人公は皇帝の宮廷で苦行の日々を送ることに

なる。ゴウサーは既述した二つの贖罪行為を、またロベールやロパートも三つのことを忠実に実行する。三作品では、主人公の苦行の日々が描かれるが、その期間については、RDとW版では具体的に語られるが、SGではそうではない。たとえば、W版では、12年間にわたって贖罪に励んだことになっている。RDでもほぼこれに匹敵する期間になっているが、SGでは、両作品に比べてきわめて短いものになっている。期間の長さはどうであれ、苦行に耐える主人公に、ある出来事が起こる。自分が庇護をうけている皇帝が窮地に陥るのである。相手は異教徒である。W版では、皇帝の娘を何とか我がものにした家令が異教徒の軍勢を集めて皇帝に攻撃をかけ、RDでは、トルコ軍の来襲にもかかわらず、家令は、皇帝に援軍を送らず、SGでは、サルタン自らが、皇帝の娘を奪おうと軍をさし向ける。そして、ゴウサーは、みずからすすんで皇帝を助けようとし、ロベールとロパートは神の命令によって異教徒との戦闘に赴く。ゴウサーは三度目の戦いで、敵の槍によって肩に傷をうけ、またロベールとロパートは、同じく三度目の戦闘の際、正体を突き止めようとした味方の騎士の槍によって腿に負傷する。しかも、その傷が神の奇蹟をもたらすのである。

SG, RD 及び W 版共に、皇帝の娘は、不幸にも唾者で、贖罪のために口が利けない主人公と同じ境遇におかれているが、SGでは、RDやW版とは違って、皇帝の娘が、神による主人公の罪の赦しを、自らの口から告げることになる。SGでは、サラセン人の槍が、ゴウサーの肩を貫くのを見た乙女は、悲しみのあまり塔から落ちてしまう。埋葬のために教皇も駆けつける。しかし、神の恩寵により、彼女は手足を動かし、しかもゴウサーに対して“*My lord of heyvon gretys the well / And forgyffeus the thi syn yche a dell / And grantys the tho blys./ And byddus the speyke on hardely. / Eyte and drynke and make mery. / Thou schallt be won of his.*”(655-60)と言葉を発する。また父の皇帝に向かって、この人こそ、三日間にわたってあなたのために戦った騎士であると告げる。新約聖書では、イエス・キリストによる奇蹟の数々が語られるが、マタ

イによる福音書 9:32-34 では、悪霊にとりつかれて口が利けない人が利けるようになる奇蹟が語られる。死んだと思った乙女が蘇り、しかも唾者が口を利くという奇蹟が神によって示される。神は、奇蹟によって、乙女の口から、ゴウサーの罪がすべて赦されたことを伝えるのである。彼女のあと教皇も、ゴウサーに対して“Now art thou Goddus chyld”(667)と言葉をかける。ゴウサーは、“fendys son”(206)から“Goddus chyld”になったのである。

RDでは、ロベールの負傷から、家令の奸計へと至り、口が利けない皇帝の娘がついに口を利き、家令の計略を暴き、父のために勝利をもたらしたのが誰であるかを明かす。彼女は次のように真相を語る。

かれ[家令]がお父様に語ったことは全部嘘です。かれではなく...わたくしどもの身近におられる方が、トルコ人たちを打ち破られ、^{ふか}深傷を負われたからです。神様はこのことで強く御心を痛められ、かれのため、大いなる奇蹟をあらわされました、これは以後常に語り継がれるでしょう わたくしに言葉を返して下さるといふ奇蹟をです。

(401)

SGでは、乙女が口を利く場面で、奇蹟という言葉は使われないが、RDでは皇帝の娘が口を利くエピソードに関連して、「人々はもう熱狂して、美わしの奇蹟を見んものと、姫を見たいと押し寄せた」(402)などのように、奇蹟という言葉が5回使われる。

このあと、どうか正体を明かして欲しいと、乙女に嘆願されるが、あくまでロベールは言葉を発することを拒む。だが、聖なる隠者に促され、やっとのことで自分について語り始める。贖罪を貫き、神に忠実であろうとする主人公の姿勢が強調される。RDでは、SGのように、神によるすべての罪の赦しがあったと、はっきり述べられていない。だが、隠者は、ロベールに正体を明かすよう説得する時に、「そなたにわたしの手から、恩寵と祝福を受けてもらうため」(407)であると、その理由について明かす。このことから、再びロベールが口を利くことは苦行の終わりを意味し、そのことはまた、奇蹟

によっても明らかのように、神による罪の赦しがあったと解釈できよう。

W版では、教会で、白い甲冑の騎士になりすました裏切り者の家令と皇帝の娘との結婚式が行われようとしている時に、“a fayre myracle”(48)が起こり、彼女の口から家令の奸計が暴露される。神は、“the holy man Robert”(48)への愛ゆえにこのような奇蹟を顕されるのである。また W 版では、天使が、隠者に、ロバートがローマで贖罪の苦行をすべて果し、神が彼の罪を赦されたと告げ、直ちにローマへ出発するように命じる。ロバートのところへやって来た隠者はロバートがこれからは“the deuyll”(50)ではなく“Seruaunte of God”(50)と呼ばれるようになると言い、神によってロバートの罪が赦されたことを伝える。このあとロバートは、“I gyue laude and thanks to God creature of Heuen and erthe, that it hath pleased the to forgyue me myne abhomyneable and grete synnes thurgh so lytell and lyght penaunce that I haue done . . .”(51)と久しぶりに己の口から言葉を吐く。残念ながら、SG では、神による罪の赦しの直後、主人公がどのような言葉を口にしたかは一切語られない。

それでは、苦しい贖罪の日々のあと、罪の赦しを得て、主人公はどのように残りの人生を歩むのであろうか。

まずゴウサー卿であるが、皇帝の娘と結婚したあと、オーストリアへ帰り、回心のきっかけとなった例の老伯爵と母を結婚させ、国の統治を任す。またその地に修道院を建て、そこを己の墓所と決める。ここで注目すべきは、神による罪の赦しがあったあとも、かつて尼僧たちを殺害したことが彼の心を苦しめることである。ゴウサーは、異教徒との戦いの時も、激しい戦闘のあと、疲労困ぱいしながらも、常に己の犯した罪のことを考え続けたのである。“He had no thought bot of is syn / And how he myght is soule wyn / To tho blys that God con hym by.”(532-34)と語られる。悔悛の秘跡の時は、涙ながらの痛悔ではなかったが、物語の終盤において俄然、主人公の罪に対する悔いの念が強調される。ゴウサーは、さきほど述べた修道院の中に女子修道院も建立する。このあとドイツへ帰り、義父亡きあと、皇帝として教会を助け、善政と

善行に励み “Of all Cryston knyghttus tho flowre”(707)となり、死後、例の修道院に葬られる。

W 版では、皇帝の娘と結婚したあと、ロバートは妻とともにノルマンディーに帰るのであるが、そこへ皇帝からの使者がやって来て、不忠な例の家令がまたもやサラセン人とともに軍を起し、ローマを包囲したと伝える。さっそく皇帝救出に向かうが、義父はすでに殺されたあとである。ロバートは、家令と闘い、彼を捕らえ、処刑する。やがてロバート夫婦の間にリチャードが生まれ、リチャードは、シャルルマーニュ王を助け、サラセン人との戦いで武勇の誉れをあげる。ロバート親子が、信心深く美德に満ちた日々を送ったことが強調される。

RDでは、ロベールは、ゴウサーやロバートとは違って、世俗の世界に留まらず、隠者の道を選択する。ロベールは、「わたしはもはや、生命あるかぎり一日も、俗世にとどまることのない身である」(409)と述べ、皇帝の娘との結婚に関して「お姫様は、決してわたしに犯されてはなりません。・・・それより、この隠者殿、深い森に住むこの方とともにまいりたい。・・・われらのために責め苦を受けられ、自らの死により悪魔の望みを挫いたあの受難者イエスに、この方とともに仕えたいのです」(410)と固い決意を吐露する。森に入ったロベールは、聖なる隠者が亡くなったあとも、イエス・キリストのために身を捧げ、森の庵の中でその波瀾に富んだ生涯を閉じる。

唾者の乙女に顕れた神の奇蹟は、結果として、主人公に聖・俗どちらかの道を選ばせる。興味深い点は、RDとW版に具体的に示されているように、悪魔のロベールの物語が、その結末の処理の仕方、聖なる物語にも俗なる物語にも変りうるということである。

SG, RDでは、W版とは違い、皇帝の娘に奇蹟が起こったあともまた奇蹟が起こる。SGにおいては、ゴウサーが修道院に埋葬されたあとの奇蹟について次のように語られる。

And he is a varré corsent parfett,

And with Cryston pepull wele belovyd;
 God hase done for his sake
 Myrrakull, for he [w]as hym hold,
 Ther he lyse in schryne of gold,
 That suffurd for Goddus sake.

Whoso sechys hym with hart fre,
 Of hor bale bote mey bee:
 For so God hase hym hyght.
 Thes wordus of hym thar no mon wast,
 For he is inspyryd with tho Holy Gost,
 That was tho cursod knyght.
 For he garus tho blynd to see
 And tho dompe to speyke, pardé,
 And makus tho crokyd ryght;
 And gyffus to tho mad hor wytte
 And mony odur meracullus yette,
 Thoro tho grace of God Allmyght. (721-38)

ゴウサーは真の聖者となり、キリスト教徒に愛される。そして彼が神に忠実であったがために、神はこれまでに彼のために奇蹟を顕わされたのである

この奇蹟は、唾者である皇帝の娘に起こった奇蹟を指し示すと考えられる。さらに“tho cursod knyght”であったゴウサーに、聖霊によって人を癒す力が与えられる。主人公は、死後において、神の恩寵により、イエス・キリストが為したような癒しの奇蹟（マタイによる福音書第10, 11章など）を、彼の墓に詣でる人々に為すことができるのである。さらに、SGでは、この引用箇所でのみ奇蹟という言葉が使われ、しかも、作品全般にわたって、RDに比べて簡略化がなされているのに対して、神の恩寵によってゴウサーが行

う癒しの奇蹟の詳細な描写がなされ、この奇蹟の場面がいかに作者にとり重要なものであるかを表している。

次に RD における奇蹟の扱いについて述べてみたい。RD では、それまでに、皇帝の娘に起こった奇蹟に関して、何回も奇蹟という言葉が使われているが、隠者ロベールにあらわれた奇蹟については、SG に比して、具体性に欠け、簡潔なものになっている。語り手は「その後ロベールは長く生きて、隠者に代わって庵に住み、いとも敬虔に神に仕えた。かれのために神は多くの奇蹟を、この世に現し給うた、かれが生命を完了するときまでに。そこで、訪れる人々はかれを聖なる隠者とみなしたのである」(411)と述べる。奇蹟はロベールが活着している間に起こる。ゴウサーの場合のように死後の奇蹟ではない。死後、ロベールの遺骸はローマまで運ばれ、聖ヨハネ教会に葬られ、その後、さる人物によって聖ロベールの遺骨は、Haute-Loire の Le Puy にあるロベール修道院に安置される。聖者の骨が移葬される時は、奇蹟が生じるのが普通であると言われている。⁷ 作品では奇蹟のことが一切述べられていないが、聖ロベールが死後においても神の力により、奇蹟を為したことが十分考えられる。

RD のパリ BN.Fr.25516 写本では、結辞が「ここに悪魔のロベール終わる」(412)となっているが、パリ BN.Fr.24405 写本では、「ここに聖ロベール終わる」(416)となっており、この物語が聖者ロベール伝であることが示されている。ちなみに、SG の R 写本では、“There he lyeth in a shryne of gold / And doth maracles, as it is told, / And hatt Seynt Gotlake.” (679-81)⁸ となっており、ゴウサーは St Guthlac と結びつけられており？ またこの写本の結辞は“Explicit Vita Sancti”で、ゴウサーの物語が聖人伝であることが強調される。

結論

聖人伝では、もともと殉教者の生涯が描かれてきたが、4世紀頃から証聖者(すぐれた聖性の生涯をもって、キリスト教の信仰を証明した人)¹⁰ が伝

記の中に登場することになる。隠者、司教などの聖職者、また聖ルイのような世俗の王も列聖されるようになる。そしてこれらの聖人たちの物語の中で奇蹟が大きな役割を果す。ジャック・ル・ゴフも「聖人伝というものは、たとえ語り^{レシ}がキリスト教的な徳や信仰心の顕れをめぐって組み立てられていようとも、一つの歴史であることには変わりがないが、概して奇蹟の羅列目録なのである」¹¹と述べている。たとえば、聖人伝の原型とされる Sulpicius Severus の *Vita sancti Martini* を見ても、そこには司教であるマルティヌスが為す治癒の奇蹟をはじめとする多くの奇蹟が語られる。ただし、この伝記は、マルティヌスの生前に書かれたため、死後の奇蹟については語られない。

SG, RD, そして W 版を比較した場合、SG より宗教的、聖人伝的なのが RD であり、SG より世俗的、騎士道物語的なのが W 版である。強いて言えば、SG は RD と W 版の折衷版と言えるかもしれないが、果してこのような大雑把な表現でよいのかどうか、少し吟味する必要がある。Andrea Hopkins は

Later versions of *Robert le Diable* have an ending which is more similar to that of *Sir Gowther*, and it is likely that the version used by the latter's author ended with the hero marrying the princess and returning briefly to Normandy before becoming emperor, rather than retiring to the forest as a hermit. *Sir Gowther* seems to reconcile the Robert who returns to the world and whose sinful past is forgotten with the Robert who continues to repent and pray; perhaps the author knew both versions.¹²

と、ゴウサー卿の物語の作者が、悪魔の口ペールの物語の聖・俗二つの版(具体的には、RD と、W 版が由来した *Dit de Robert le Diable*) の両方を知っていた可能性を指摘している。悪魔の口ペールの物語の流布状況から見て、この可能性は十分に考えられる。それでは、SG の作者はどのような選択をしたのか。この作者は、主人公には、隠者になる代わりに皇帝の娘と結婚させた。しかし、RD に描かれる隠者となった口ペールに顕れる奇蹟はそのまま

残した。ただし、ゴウサーの場合は、死後の奇蹟であるが。ゴウサーが騎士道の華と称せられ、自ら鍛えた剣“facion”(先端が太く、基部が細い刀で *Sir Launfal* もこの種の剣で戦う)を絶えず手放さないことや、異教徒との三日間にわたる戦闘では、それぞれ黒、赤、白の甲冑で戦うなど、この詩人が騎士道物語的要素を加味していることは事実である。しかしながら、聖人伝にとって重要な要素となる奇蹟を物語の中にとりいれたことは、作者が、ゴウサーの物語があくまでも聖人伝であることを示そうとしていることを表している。

SG を締め括るスタンザの冒頭で、語り手は“Thus syr Gwother coverys is care, / That fyrst was ryche and sython bare, / And effte was ryche ageyn; / And geyton with a felteryd feynd, / Grace he had to make that eynd / That God was of hym feyn.”(739-44)と語る。引用箇所前半では、公爵から、犬の口から食べ物を奪うまでに身を落とし、再び皇帝の地位に昇り詰めたことが、“rich”と“bare”で示され、きわめて世俗的観点から人生の浮き沈みについて語られる。後半では、宗教的観点から、毛むくじらの悪魔の子が神の恩寵を受け、神に祝福されるまでになったことが述べられる。ここでは、主人公の誕生から、キリスト教徒としての善き最期、聖遺骨による奇蹟までが示唆されている。作者の力点は当然であるが後者に置かれる。W版では、既述したように、悪徳三昧に耽るライオンのように傲慢な口バートが羊のようにおとなしく、美德に満ちた人間になったことが奇蹟と呼ばれているが、悪魔の息子、呪われた騎士であるゴウサーが、神の子、聖者になることがまさに神による奇蹟と言えるであろう。イエス・キリストの為した奇蹟の中に、祓魔の奇蹟があるが、ゴウサーの場合もこれにあたと解釈できる。

聖人伝では、聖人と悪魔の戦いが描かれるが、たとえば、マルティヌスは、神の慈悲と罪の赦しを巡って、悪魔と激論をかわす。マルティヌスは悪魔に対して「過去の過ちはより善い行いをするよう悔い改めることによって洗い流されるし、また罪を犯さなくなった人々には主の慈悲を通してその罪が赦

される」と言うが、これに反論して、悪魔は「罪人に赦免は認められないし、一度墮落した者たちには主からどのような仁慈も与えられない」と主張する。¹³ ゴウサーは、悪魔と人間の女の間にできた子どもとしてこの世に誕生する。しかし、彼は、神の導き、恩寵によって、犯した罪を悔い、悪魔との戦いに勝ち、神の子となる。そして神への忠誠を証したゴウサーに奇蹟が顕される。

自ら十字軍に参加し、騎士と君主の鑑である聖ルイが13世紀に現れるが、皇帝として善政に努め、神の僕でもあるゴウサーは、証聖者ルイと同じような存在である。¹⁴ J.フィルハウスは、聖人伝とは「ある聖人の、つまり、善き人生と行いのために死後信者から崇敬された人の、人生を述べた物語であり...聖人の人生を描写することを通じて、人々の精神的教化と崇敬の促進が目指されたのである」と述べ、さらに「聖人物話は道徳的に良い模範的な人間しか主題にしない」と付け加える。¹⁵ SG は、神の恩寵と罪の赦しについて教える物語である。作者は、この教訓を教える良き手本ならびに神と罪深き人間の仲介者として、俗世を捨てて聖なる隠者となるゴウサーではなく、俗世にあっても、神の子となって、また皇帝として、信仰と善行に生きるゴウサーを選んだのである。悪魔の息子から神の子になるゴウサーが教化のための「模範的な人間」となるのである。近親相姦によって生まれ、自らも母親と結婚するという運命を背負う教皇聖グレゴリウスは、善き罪人(*bon pecheor*)¹⁶と呼ばれるが、SGは、世俗的要素が加味されているとは言え、善き罪人ゴウサーの贖罪と神の恩寵、奇蹟を語る聖人伝である。具体的に描写される呪われた騎士であったゴウサーの死後の奇蹟を通して、ひとつとは、ゴウサーの聖性と神の力の偉大さ、神の計り知れない恩寵を実感するのである。RDにおいて、人々が皇帝の娘に起こった奇蹟を見んものと押し寄せるように、奇蹟は何よりも信徒の心にアピールする。ゴウサーの聖遺骨が為す奇蹟は、SGのプロットの展開、主題にとってきわめて重要であり、またこの奇蹟がこの物語を聖人伝にしているのである。

注

- 1 Dieter Mehl, *The Middle English Romances of the Thirteenth and Fourteenth Centuries* (London: Routledge & Kegan Paul, 1967), p. 127.
- 2 *Sir Gowther* のテキストとしては、A 写本を採用した Maldwyn Mills (ed.), *Six Middle English Romances* (London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1973) を用いる。() 内の数字は行数を表す。また A 写本、B 写本の両方を編纂した Cornelius Novelli, *Sir Gowther (An Edition)* (Diss. University of Notre Dame, 1963) と、中世 英国ロマンス研究会訳『中世 英国ロマンス集第二集』(東京:篠崎書林, 1986) を参照した。
- 3 テキストとしては、天沢退二郎訳「悪魔のロベール」『フランス中世文学集 3 笑いと愛と』新倉俊一他訳(東京:白水社, 1991) を用い、() 内は頁数を示す。
- 4 W 版のテキストとしては、William J. Thoms (ed.), *Early English Prose Romances Vol. I* (New York: AMS Press, 1970) を用い、() 内は頁数を表す。
- 5 2 歳半ばの Merlin は、母親の聴罪司祭である Blaise に、悪魔の子である自分がなぜ神のしもべになったかを次のように説明する。
- You heard me say I was fathered by a demon, but you also heard me say that Our Lord gave me knowledge of the future. If you were wise, this would be a sign to you of which way I would incline. Be assured that from the moment it pleased Our Lord to grant me this knowledge, I was lost to the Devil. But I haven't lost the demons' craft and cunning: I've inherited from them some useful things, but they won't be used for their benefit! It wasn't a wise move on their part to beget me in my mother: they chose a vessel which would never be theirs—my mother's good life did them great harm! (Nigel Bryant [trans.], *Merlin and the Grail: Joseph of Arimathea, Merlin, Perceval* [Cambridge: D. S. Brewer, 2001], p. 61)
- 6 テキストとしては、Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987) を使用し、() 内は行数を示す。
- 7 渡邊昌美著『中世の奇蹟と幻想』(東京:岩波書店, 1989), p. 75.
- 8 テキストとしては、Thomas C. Rumble (ed.), *The Breton Lay in Middle English* (Detroit: Wayne State University Press, 1965) を用い、() 内は行数を示す。
- 9 H. Vandelinde は、Gowther と Guthlac の共通点について “The parallels between Gowther and Guthlac are many. The violent youth, the sudden conversion, the gruelling penance, and the eventual signs of God's grace all coincide and indicate that the connection between the two is an extension of theme that the text has carefully nurtured from the beginning.” (Henry Vandelinde, “*Sir Gowther: Sainly Knight and Knightly Saint*” *Neophilologus* 80 [1996], 144) と論じている。また、SG では、ゴウサーの死後の奇蹟で物語は終わるのである

が、これと同じように、修道士Felixによって書かれたGuthlac伝は、Guthlacの墓前で起こる、盲目の老人への治癒の奇蹟で幕を閉じる。(Bertram Colgrave [trans.], *Felix's Life of Saint Guthlac* [Cambridge: Cambridge University Press, 1985], pp. 167-71.) しかし、相違点は残る。Guthlacが隠者であるのに対して、ゴウサーは、13世紀フランスの俗人の聖なる王であるルイと同じく「中世には稀なカテゴリーに属する俗人の聖人」(ジャック・ル・ゴフ著 岡崎敦他訳 『聖王ルイ』[東京: 新評論, 2001], p. 1061)なのである。

- 10 「しょうせいしゃ(証聖者)」、『キリスト教百科事典』小林珍雄編(東京: エンデルレ書店, 1960).
- 11 ジャック・ル・ゴフ, p. 23.
- 12 Andrea Hopkins, *The Sinful Knights: A Study of Middle English Penitential Romance* (Oxford: Clarendon Press, 1990), p. 157.
- 13 スルピキウス・セウエルス著 橋本龍幸訳「聖マルティヌス伝」『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』上智大学中世思想研究所編訳・監修(東京: 平凡社, 1999), p. 913.
- 14 ゴウサーも、ルイ王も、神の恩寵によって奇蹟を行うが、それは死後のものである。聖ルイの奇蹟について、ジャック・ル・ゴフは「キリスト教における聖人は、その生涯および奇蹟という二つの性質によって定義される。・・・まず第一にもっとも重要な点は、聖ルイの奇蹟はすべて彼の死後生じているということである」と述べる。そしてルイの聖性が1世紀前のインノケンティウス3世の規定に添うものであることを指摘する。教皇は、1199年1月12日の聖ホメボンの列聖文書の中で、「闘う教会にあっては、聖人と称されるためには二つのことが要求される。生活の徳およびしるしとして現われる真理、すなわち、生前の信仰の業と死後の奇蹟の発現である」と述べ、死後に発現した奇蹟しか有効でないと規定している。(ジャック・ル・ゴフ, pp. 1070, 1078-79) 従って、ゴウサーの死後の奇蹟もこの規定に添うものである。
- 15 J・フィルハウス「中世の聖人物語にみられる人間像」『中世の人間像』上智大学中世思想研究所編(東京: 創文社, 1987), p. 184.
- 16 『教皇聖グレゴリウス伝』では、冒頭で、この物語の教訓について次のように語られる。

さてお聞きなされ、神の愛にかけて、/ ひとりの善き罪人の生涯の物語を。/
アキテーヌの土地に生れたが、/ 彼の罪はまことに奇異なものであった。/
語るもおどましきかぎりではあるが、/ それでもなお人はそうせねばならぬ、/
ほかの罪人たちに聞かせることで / しかと思いきこすことのできるよう。/
私のお話したいこの罪は、断じて / 自慢するために語るべきではなく、/

他の人々の手本に供することにより、/ 彼らがそこから教訓を学びとるため。

(1-12)

テキストとしては、新倉俊一訳「教皇聖グレゴリウス伝」『フランス中世文学集4 奇蹟と愛と』新倉俊一他訳(東京:白水社,1996)を使用し,()内は行数を表す。

Synopsis

From a Devil's Son to a Saint: Miracles in *Sir Gowther*

Kenichi Akishino

Sir Gowther was composed around 1400 in the North Midlands and is extant in the following two manuscripts: MS Advocates 19.3.1 (National Library of Scotland) and MS Royal 17.B.43 (British Library). This anonymous poem is the story of Sir Gowther's penance and God's grace. Sir Gowther, fathered by a devil, works his father's will faithfully and commits awful crimes. He, however, repents his evil deeds and does penance, and finally his sins are forgiven by God. God works miracles as manifestations of His love, mercy, and grace to the penitent. Even after Gowther's death people witness miraculous cures, which testify to his sanctity, at his shrine. *Sir Gowther* is a version of the legend of Robert the Devil. In France *Robert le Diable* was written probably in the late twelfth century, and *Le Dit de Robert le Diable* was composed in the fourteenth century. Moreover, *La vie de terrible Robert le diable*, a prose redaction of the *Dit* was printed in Lyons in 1496. In England *Robert the Deuyll*, an English prose version of the *Vie* was printed about 1510 by Wynkyn de Worde. D. Mehl states: "*Sir Gowther* holds a particularly interesting position between the romances and the legends." Is *Sir Gowther* a romance or a saint's legend? My paper will focus on the function of miracles in *Sir Gowther* and discuss the hagiographic elements of the poem. On some important points I will attempt a comparative analysis of *Sir Gowther* and the two versions of the legend of Robert the Devil, *Robert le Diable* and Wynkyn de Worde's *Robert the Deuyll* to describe the characteristics of *Sir Gowther*.

Although *Sir Gowther* has some features of secular chivalric romance, it is one of the saints' legends. Sir Gowther, repentant of his wrongdoings of the past, lives an exemplary Christian life, is revered as a saint, and works miracles after his death through the grace of God. One version of the poem (MS Royal 17.B.43) ends, *Explicit Vita Sancti*, and makes the identification of the hero with St Guthlac. The fact makes it obvious that this version is a hagiography. A miracle is a vital element to a saint's life: for example, in Sulpicius Severus's *Vita sancti Martini*, a principal model for later hagiographers, Martin's holiness is ascertained by his various miracles. In *Sir Gowther*, the poet depicts Gowther's miracles at his shrine in detail. The author puts emphasis on many miraculous cures effected by Gowther, once a cursed knight, now a saint. The miracles bespeak God's grace to him and testify to the hero's sanctity. In *Robert le Diable*, although the poet says that God works many miracles for Robert while he lives in the forest as a hermit, he does not describe the miracles in detail and concretely as the author of the Middle English poem does. In *Robert the Deuyll*, no miracles occur to the hero after his marriage with the princess of the emperor of Rome whom he defends from the attacks of the Saracens. By closing his narrative poem with the delineation of miracles performed by Sir Gowther, a saint begotten by a devil, the poet shows clearly that *Sir Gowther* is a saint legend. A moral which the poet expects his audience to draw from this story is that even if people commit the gravest sins, they can acquire God's grace by their repentance and penance. Sir Gowther who is spiritually regenerated after great guilt through God's grace and venerated as a saint exemplifies the moral.

In *The Sinful Knights: A Study of Middle English Penitential Romance*, A. Hopkins discusses the relationship between *Sir Gowther* and the two versions of Robert the devil which possibly the English author knew: "*Sir Gowther*

seems to reconcile the Robert who returns to the world and whose sinful past is forgotten with the Robert who continues to repent and pray; perhaps the author knew both versions.” The two versions which Hopkins points out are *Le Dit de Robert le Diable* and *Robert le Diable*. The former is a secular poem, and the latter is a pious one. It is possible that the two contrastive versions of the legend of Robert the Devil gave the English poet a hint as to the characterization of Sir Gowther. The English poet’s intention is to write a religious poem displaying features characteristic of a saint’s legend. He, however, chooses the Gowther who remains in the secular world, becomes emperor and a servant of God, and practices Christian virtues in a truly exemplary manner rather than the Gowther who leaves the secular world and lives in his hermitage. How does the author make the poem have hagiographic features? He depicts Sir Gowther’s miracles in detail at the end of the story. Especially the miraculous cures effected by Sir Gowther through God’s grace perform an important function in the poem. The miracles make the English poem a saint life and convey its message that God’s grace is so abounding that even a devil’s son becomes a saint and works miracles. *Sir Gowther* may be an eclectic product of the profane and sacred French versions, but hagiographic elements are thrown into relief in the English poem.